

Human Interview

豊かな
高齢社会を
実現する
ために



**踊り出したら止まらない
おばちゃんパワー炸裂**

—発起塾を始めたきっかけは？

地下鉄サリン事件の後、仏教関係者の間で「カルト宗教に走る若者をなぜ救えなかったのか」ということが話題になりました。その頃、お世話になっていた一心寺の住職から「仏教を身近なものにしたい」と相談を受けて、始めたのが落語や演劇、ダンスなどのエンターテインメントと法話をセットにした「二心寺日曜学校」でした。若者を意識した企画でしたが、フタを開けるとそこに集まったのは60歳前後の中高年でした。これが発起塾の前身になっています。

—中高年向きの内容に変更されたのですか？
ダンスで捻挫やギックリ腰になるのが心配で「極力動かないダンスを」とダンス担当の先生に依頼しました。ところが、中高年のみなさんは、踊れば踊るほど元気になって「次は何やるの？」と待ち構えている。その横で20代のスタッフが音を上げているんですよ。正直驚きました。このとき、中高年のエ

ミュージカルが教えてくれた 自分らしくどう生きるか

高齢社会といえば「介護」を連想しがちです。しかし、その大多数は元気な人たちです。そんな中、50歳以上100歳未満の素人がミュージカルを上演するというユニークな演劇活動が全国に広がっています。今回は、中高年ミュージカル劇団「発起塾」を主宰する秋山シュン太郎さんに、その人気の秘密を伺いました。

ネルギーを発散できる音楽劇の可能性を強く感じたことが発起塾の発足になったのです。劇団員募集の記事が新聞に載った日は、朝から電話が殺到。結果75人ぐらいの方が入団しました。

**それぞれが背負ってきた
人生をそのまま活かす**

—稽古場はどうですか？

明るいですよ。みんなやる気満々。積極的に質問されます。ただ、いかんせん、なかなか頭に入らない。とくにダンスはせっかくな覚えなくても次のレッスンではまたイチから教える…そのくり返し。それでも劇団員が一所懸命、いきいきしているの、先生方も粘り強く教えています。

—劇団員にはどんな方が？

「50歳以上」「何にもできない（演劇未経験）」「人が参加資格です。敷居が低いので、職業も、育った環境も、演劇に対する思い入れも全然違う人が集まっています。役職に就いていた人は何かと命令しがちだったり、専業主婦の人は世話好きだったり、その人の人生が、心や身体、

あきやま 秋山 シュン太郎 さん

脚本・演出家。「特定非営利活動法人発起塾」代表。大阪教育大を卒業後、劇作活動へ。舞台はもちろん、ミュージカルを中心にTV、ラジオドラマなどの台本も執筆。手がけた作品は50を超える。1999年に中高年のためのミュージカル教室「発起塾」を創立し翌年NPO法人化。演劇を活用した中高年の生きがいづくりの活動は全国に反響を呼んでいる。現在、大阪、和歌山、京都、神戸、岡山、名古屋の全6拠点に広がり、劇団員は約250名。海外公演、遠征公演なども行い、今夏にはエディンバラ演劇祭（イギリス）に参加する予定。



います。例えば『コンビニダンスストア』では、コンビニを舞台に初老夫婦が小さなけんかを始め、それからコンビニを訪れる人々がそれぞれ夫側と妻側に付いて浮気や別居の話にまで発展します。ある場面で妻が夫に対して「昔はそうじゃなかった。私と会う時だってオシャレしてきてくれたでしょ」と、中高年の女性の気持ちを代弁するような台詞を入れるんです。この演目を見に来ていた人たちに後で聴くと、その多くは、夫が「お前もそう思うのか？」と妻に尋ねていることがわかりました。

—たくさんの人たちの共感を呼びそう
ですね

発起塾には、劇場公演を行うクラス以外に「発起塾ライト」という、施設等への出前公演をメインとする小編成のクラスがあります。出前公演では芝居の後に「ダンスでゴー」と称して観客と一緒に、SMAPやAKB48を踊って、好評です。観ている人もホントは「やりたい」んですよ。こうして劇団員と観客が一緒に盛り上がるのはミュージカルの強みだと感じています。

**歳はとっても心は乙女
純粹に人生を楽しみたい**

—演劇活動によって、劇団員にはどんな
変化がありましたか？

「夫婦の会話が増えた」「自信が持てた」という人が圧倒的に多いです。稽古のためにスケジュールをやりくりしたり、人に迷惑をかけないように健康

言動に反映されています。稽古場に、みんな「我」を持ち込んでくるわけです。—我が強くて演技にならないのでは？
いいえ。それぞれの味やクセというのは、キャラクターとしてはむしろプラスの要素。配役の時、積極的に活かします。例えば、ちょっとわがままに生きてきた人にはそんな役を振る。素のままでリアルな台詞回しになります。個性と個性がぶつかり合う舞台は楽しいですよ。ただし、演劇は集団芸術なので、他の劇団員の演技や活動を妨げることだけは注意しています。

**中高年が共感できる舞台は
心の代弁者**

—どんな脚本が多いのですか？

中高年が共感できるテーマで、何らかのメッセージを投げかけるようにして



維持にも気を遣ったりと生活スタイルも変わっています。公演当日は家族の「朝、昼、晩の食事を用意してきた」という人もいます。ワクワクすることのためなら、人間は何でもやれるんです。—高齢社会が楽しいものになるような気がしてきました

発起塾の女性メンバーは、歳をとってもみんな乙女。自分を表現したい、人生を楽しみたいと純粹に思っています。僕も50歳を超え実感しています。が、実年齢と自分が思っている年齢とのギャップは大きい。そのことを演劇を通じて発信しつつ、これからの中高年が「どう自分らしく、いきいきと生きるか」を考え、活動を続けていきたいと思っています。



子どもたちの未来

その④（最終回）

8年ほど前に国際会議に出席した際、世界保健機構では「子どもが7つの暴力にさらされているので守るべきだ」という説明を聞いたことがある。

その7つとは「戦争」「高齢者虐待」「夫婦間虐待」「青少年間の暴力」「自身への暴力」「児童虐待」「性暴力」であった。

先日、私は福島市を訪問し、もう一つ子どもにも暴力を与えているものを付け加える必要があると感じた。それは「原発事故」である。これは目に見えない暴力だが、明らかに子どもたちの成長発達を阻害し、普通に生活する権利を奪っている。

福島市では、戸外遊びが制限されて

原発と公園

流通科学大学
サービス産業学部 教授
加藤 曜子さん

おり、子どもたちのために、市内にくつかりの遊び場を作っている。私が見学したサンドパークは、体育館をつぶして屋内に砂場とエアマット、ボールプールなどが設置された屋内公園であった。1時間半を4回に区切り、予約制となっている。土日は朝から100組以上の親子連れがくるので、満員のため入りき

れない状態であるという。

一人の赤ん坊がハイハイし、兄らしき子どもを追いかけ、自らもエアマットによじ登っていき姿に引き付けられた。小さくてもたくましく、瞳は好奇心に満ち溢れていた。日頃狭い空間に暮らす子どもにとって、その一瞬を無駄にしないで精いっぱいエネルギーをぶつけているようでもあった。遊ぶ子どもを見ていた親たちは何かほっとリラックスされているようにも見受けられた。私たちもまた被害者であった。

児童虐待問題の広がりで見られる命もある一方、子どもを泣かせることが悪いことのような風潮になっているこ

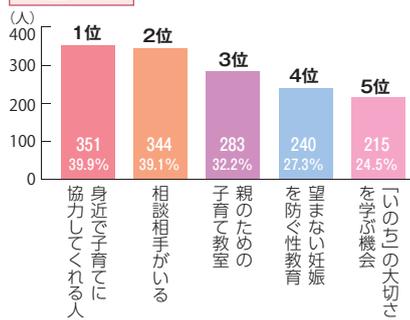
とにやささかの危惧をいなく。通告は決して悪者さがしではない。子どもの叫びをどう見つけだし、親を支援するかが重要であり、通告もその一つなのだという風潮にならない限り、窮屈な子育てになりかねない。

安心して子どもを遊ばせることができる環境づくり、親が子育てに疲れたとき、ほっと一息つけるような場づくりが、今後必要である。親になる若者が楽しく子育てができる環境づくりを考えたい。

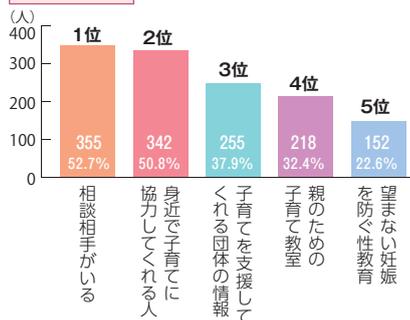
4回の連載を通じ、子どもの安全と安心な暮らしについて報告させていただき、誌上を借りてお礼申し上げます。

■高校生、大学生を対象に「若年の親による児童虐待を防ぐ方法」をたずねた (複数回答)

高校生 (879人)



大学生 (673人)



奈良県児童虐待防止啓発方策検討事業報告書をもとに作成

高校生は、「身近な協力者」や「相談相手」を挙げ、次いで「教育を受ける」などの受身的な態度が見られます。大学生は、高校生と同じですが、第3位に「情報を求める」行為を挙げています。高校生に比べるとより能動的な動きが加わり、その点に違いが見られるといえます。



加藤 曜子さん ●プロフィール
流通科学大学 サービス産業学部 教授
専門分野 児童家庭福祉
NPO法人児童虐待防止協会 理事
家庭裁判所調査官を経て、渡米し児童・青少年問題に接し、予防の大事さを実感。著書に「子どもを地域で守るネットワーク」(編著・中央法規、2008)等。